

崑山劇の遺したもの — つながりと共感 —

大 崎 洋

1 はじめに

市民劇「没後180年記念 海風に吹かれて— 渡辺崑山の後半生—」は、昨年(2021)12月4日・5日の2日間にわたって、田原市文化会館・文化センターで開催された。開演は2日間とも11時・16時の4回公演で行われた。

コロナ禍であったが、定員350人に対しいずれも満席状況であり4回の入場者は1,289人であった。感動のあまり、涙する人もあり、「大河ドラマを見ているよう」⁽¹⁾と劇は大好評であった。

「別紙 主要出演者へのインタビューの内容」でも確認できるが、崑山劇を通じて、出

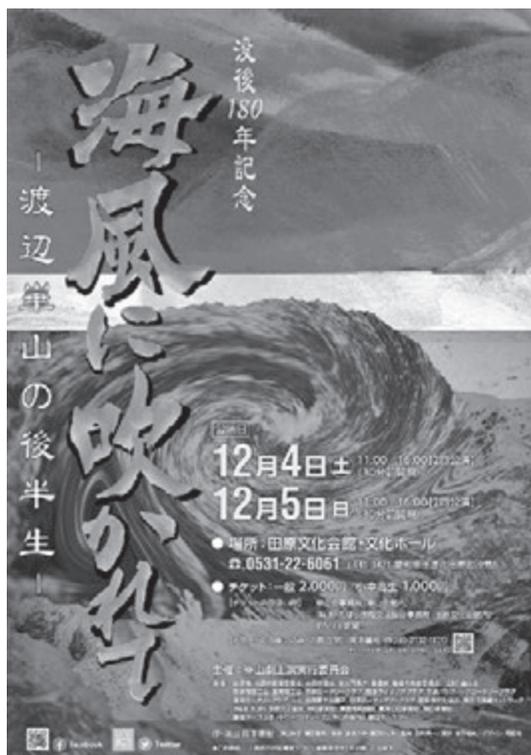


写真1 崑山劇ポスター(崑山劇上演実行委員会提供)

演者を含む関係者や観客は「つながり」と「共感」をそれぞれもつことができた。

以下、インタビューを除き、本文中の敬称は省略する。

発案者であり監修にあたった、元愛知大学教授の別所興一は、こう語る。

「地元田原の中部小学校では、昭和初期から「立志」、「板橋の別れ」と題する崋山劇が上演されている。少年崋山の心の動きを鮮明に表現した、せりふや男性合唱の心に沁みる調べは、多くの住民に、元気の素をもたらしてきた。過去の崋山劇は昭和初期の戦時体制下で制作されたが、21世紀の今日、新たな崋山劇の更新が求められている。それで、2016年から構想を進め、地元のアマチュア劇団「タハラジャ」の関係者を中心に有志を募り、公益財団法人「崋山会」や商工会・青年会議所などにも呼びかけ協力を得て、2021年3月7日に崋山劇上演実行委員会を立ち上げた。

作・演出家の岡本善裕氏を中心に一年あまりかけて創作した台本は、少年崋山ではなく、崋山の後半生、特に文人画家として名声を博していた崋山が、40歳の時に田原藩の江戸家老と海防掛に任せられ、本格的に蘭学を学び、外国事情を研究するようになった以後に焦点を合わせている。

開国前の徳川日本で、封建と近代、政治と芸術、西欧とアジアのはざままで悪戦苦闘し、近代日本の夜明けを準備した徳川知識人渡辺崋山とその周辺の人々の生きざま、悲喜怒哀楽の一断面を演劇の舞台上で提起し、観客の皆さんと共に追体験したいと考えたからである。

この上演を通じて田原市周辺の文化の風おこしに寄与したい。」⁽²⁾と崋山劇は、このようにして始まった。

2 崋山劇の概要

2.1 崋山劇のテーマ

「封建と近代、政治と芸術、西欧とアジア

の狭間で悪戦苦闘し、終には自死に至った崋山。こうした崋山の生き方、考え方が、この劇のテーマである。舞台では、近代日本の夜明けを準備した崋山と蘭学仲間の高野長英や小関三英、そして若き田原藩士、さらには崋山の家族など周辺の人々の生きざま、喜び悲しみのこころ模様を表現。崋山は蘭学研究などを通して世界情勢の本質を鋭く見抜く眼と新しい日本のヴィジョンを獲得する。しかし、それが許されない時代に生きた崋山は強固な時代の壁と格闘する。崋山の考え方や行動には、現代に通じるものがある。グローバル化の進む現代、この劇が世界や日本を考えるきっかけになると共に、新しい崋山像の発見になることを願う。」⁽³⁾としている。

2.2 編成等

1 崋山劇上演実行委員会 実行委員長：石黒功、事務局長：彦坂久信。

2 作・演出：岡本善裕、脚本補作・演出助手：藤田直秀⁽⁴⁾、制作：彦坂久信、藤田ひとみ⁽⁵⁾。キャスト33人・スタッフ25人・音響照明、受付や会場係まで含め総勢75名の大がかりな市民劇。

3 主要な役者は、田原市の市民劇団「タハラジャ」や東三河演劇ネットワークに所属する劇団員から、その他の配役については、オーディションを実施（6月11日）し決定した。筆者（1951年生まれ）は、崋山会館内で毎月第4土曜日に実施される、崋山史学研究会に参加していることが縁で、オーディションを受け、満69歳の松崎慊堂（こうどう）役で出演した。

4 チケット料金は、大人2,000円、小中高生1,000円。

2.3 あらすじ

画業や藩政に励む場面や、蟄居先で切腹する場面など2幕18場、計2時間半。

序曲（プロローグ）

【神島の岩場】天保4(1833)年、崋山41歳(数え年)

第1幕

【第1場】江戸麴町の高野長英宅、文政3(1832)年9月、崋山40歳

【第2場】田原巡遊、天保4(1833)年4月、崋山41歳

【第3場】田原城、藩主の御殿庭

【第4場】江戸巢鴨の三宅友信邸、天保7(1836)年12月、崋山43歳

【第5場】江戸麴町の崋山宅、天保8(1837)年、崋山45歳

【第6場】江戸品川の料亭の座敷

【第7場】紀州藩儒・遠藤勝助の屋敷、天保9(1838)年10月、崋山46歳

【第8場】鳥居耀蔵の屋敷

第2幕

【第1場】江戸岸和田藩邸内の小関三英宅、天保10(1839)年5月

【第2場】鳥居耀蔵(ようぞう)の屋敷

【第3場】町奉行所のお白州、天保10(1839)年6月、崋山47歳

【第4場】①椿椿山居宅／②松崎慊堂邸、天保10(1839)年7月

獄中の崋山を救援する運動が、画弟・椿椿山が中心となって進められる。多方面に働きかけ、最終局面で、老いたる儒学の恩師・松崎慊堂の応援を願い、崋山赦免の嘆願書を執筆してもらう。

【第5場】品川宿はずれの高台、天保11(1840)年1月

【第6場】池ノ原の崋山幽居、天保11(1840)年7月、崋山48歳

【第7場】池ノ原の崋山幽居 天保12(1841)年5月、崋山49歳

【第8場】池ノ原の崋山幽居、物置小屋で切腹、天保12(1841)年10月11日

【第9場】池ノ原幽居の物置小屋の前、天保12(1841)年9月

【第10場】①田原池ノ原幽居の庭／②江戸小

石川 椿椿山宅／③小伝馬町大牢

終曲(エピローグ)

●赤羽根海岸の物見小屋近く、天保14(1843)年10月、崋山没後2年

3 松崎慊堂について

松崎慊堂(明和8(1771)年～天保15(1844)年)は蛮社の獄で逮捕された、渡辺崋山の救出ため、高齢をおして、まさに命をかけて赦免の陳情上書「崋山赦免建白書」⁽⁶⁾を書き、老中水野忠邦へ提出した。江戸時代後期(化政・天保年間)の佐藤一斎と並ぶ儒学者である。

慊堂の人間的な魅力の第一は、他人を思う温かな心である。

横井小楠(1809-1869)は「慊堂の人となりは靄然(あいぜん おだやかなさま)として春風の裡にあるようで、胸仲にはいささかの城郭もない」⁽⁷⁾と述べている。

崋山は、慊堂には33歳から師事した。慊堂にとって崋山は大切な弟子であり、どうしても生かしておかねばならない人間であった。恩愛の情を超えて、慊堂の目が時代の先の方に向けられていた。慊堂を師として尊敬し、師弟として深い関係にあった崋山は、慊堂の肖像画を数回にわたって描いている。一人、崋山を見捨てなかった儒学者は松崎慊堂である⁽⁸⁾。

慊堂は貧乏学生であったにもかかわらず、一時の感情に任せて結婚してしまった。2人の出逢について漢学者・史家である中根香帝(1839-1913)の『香帝雅談』には、

「慊堂が書生たりし時、日晚れて娼家に宿す。夜半起きて灯下に坐し、書巻を出してこれを読む。娼、怪しみてこれを問う。慊堂告ぐるに書生苦学の状を以てす。一月の学費幾許ぞと。曰く二方金に過ぎず。娼笑いて曰く、これ妾の一日の花費のみ、これを得るは難きに非ず。妾しばらくこれを弁せんと。慊堂悦びて去る。これより娼、月に必

ず、二方金を遣し、以てこれを助く。慥堂これを以て専ら学を攻むる得たり。後、家を成すころ、娼、年邁ぎ色衰え籍を落とす。ここに於いて慥堂これを迎え、家に居らす。俸養豊備、以てその徳に報ゆ。」⁽⁹⁾とある。

これは、「験の母」、「国定忠治」など、任侠や義理と人情を中心に描いた作家、長谷川伸(1884-1963)の作品「一本刀土俵入り」を連想させる記述である。

慥堂の生涯は、その著『慥堂日歴』⁽¹⁰⁾からも義理と人情に満ち溢れ、泣かせる話で一杯だ。ますます松崎慥堂に惚れ込み、筆者の出番は、【第4場】②松崎慥堂邸だけであったが、自宅の名古屋から田原まで、毎週車で2時間半かけて稽古場(田原市神戸市民館・権現の森)に通い、稽古に臨んだ。

4 本番まで6カ月の俳優修行

本番まで次のことに留意して稽古に取り組んだ。

4.1 立派な俳優になるには心身ともに健康であること

俳優の高倉健(1931-2014)は、「俳優の条件で最も重要なのはより多くの観客を惹きつけることだ。私よりっばな俳優になるには心身共に健康であることが必要だと考える。肉体と精神が健康でなければ、俳優という商売は務まらない。」⁽¹¹⁾と著している。

4.2 演技するということ

1 作家・演出家の鴻上尚文は、「言葉と身体と心の三つのうち、一番大切なものは、演技では、セルフよりも、動きよりも、心、つまり気持ちが一番重要」。そして「『自意識』は、演技の敵、演技で一番の敵は『自意識』である。「自意識」とは、うまくやろうとか、恥をかきたくない、友達に笑われたくないという意識であり、「自意識」が心の動きを停止させる。」⁽¹²⁾と説く。

4.3 活舌(アーティキレーション)の訓練

鴻上尚文は「早口言葉を言おうとして、体に余計な緊張が入ってしまうので体に余計な緊張が入ってしまう場合が多いので、「早口言葉」や「外郎売り」のかわりに朝日新聞の「天声人語」や読売新聞の「編集手帳」を利用するのが良い」⁽¹³⁾という言葉を参考にした。

4.4 世阿弥の言葉から

1 「老木に花の咲かんが如し」(『風姿花伝』第二物学条々、第五別紙口伝)

老いを自覚しているからこそ、毅然としていたいと願う。この気持ちの高ぶりこそが、老いの「花」だというのである。老人を演ずるからといって、老いをそのまま出してはいけない。それを隠そうとして突っ張ってみせる。それこそがまさに、老いの姿だ、⁽¹⁴⁾と説く。

2 「稽古は強かれ、情識はなかれとなり。」(『風姿花伝』序、第三章物学条々)

稽古どンドンやれ、しかし、客観性のない、慢心による凝り固まった心を持つてはならない。日常から芸と向き合う真摯な態度を要求している。⁽¹⁵⁾

3 「離見の見にて見る所は、すなわち、見所同心の見なり」(『花鏡』無声為見)

世阿弥は『花鏡』に演者は次の3つの視点を意識することが重要だと説く。

1つ目が「我見」、役者自身の視点。2つ目が「離見」、観客が見所(客席)から舞台を見る視点。3つ目が「離見の見」、役者が、観客の立場になって自分を見ること。客観的に俯瞰して全体を見る力が必要である、⁽¹⁶⁾と伝える。

5 入場者のアンケート結果⁽¹⁷⁾

4回の入場者総数は1,289人であった。アンケートに答えた人は599人(男性213人、女性310人、無回答76人)で回収率は46.47%だった。

10代が17人、20代が31人、30代が21人、40代が50人、50代が97人、60代が164人、70代が165人、その他が無回答で、中高年が圧倒的に多かった。

全入場者のうち、田原市からの来場者は70.6%、遠方(東京都、静岡県、三重県)からの来場者もあった。

入場者は崋山の人間性や出演者の熱演に感動し、劇は大好評であった。

「誰の心にも響く劇だ」(田原市・30代女性)、「演技に引き込まれ、当時の人の心を思い、涙が止まらなかった」(同・40代女性)と感激していた。

崋山の印象について、「人柄がとても親しみやすく感じられた」(豊川市・50代女性)、「世界を見据え、日本の将来を考えていた」(浜松市・60代男性)、ととらえ、他方で「平穏な暮らしを求めている人だった」(田原市・70代女性)と綴っていた。

その一方で会場の設備面(暖房設備)や上演時間の長さについて、不満を指摘した人もあった、しかし「劇の話聞いた時、(入場料が)2,000円?ところが幕が下りた時には納得した。感動をありがとう」(同・70代男性)と綴っていた。

さらに、「会場満員で久しぶりに文化の風が崋山を通して田原に吹いてくれた」(同・60代女性)、「崋山先生の人生を通じて、日本を変えるため、力を注いできた方々の努力と信念、それに支えられて今の日本があるのだと学んだ。先達たちに感謝し、自分も今日から信念を貫き自分の人生を作りあげていこうと思った。」(同・10代女性)

劇の感想を綴った人のうち、1割強の観客

が「定期的な公演はできないのか」(同・60代男性)など再演を望んでいた。実行委員会の石黒委員長は「反響の様子が伝わる。今後、結果を分析して対応していきたい」と語った。⁽¹⁸⁾

アンケートを集計・分析した崋山劇事務局広報担当の小川金一は「今回の崋山劇上演効果は、演劇手法による情報提供から歴史への関心や、登場人物への興味・関心を高めた。また、地域活性化を生む可能性を秘めたツールであると思われる。」と総括した。

6 主要出演者へのインタビュー

6.1 インタビューをした人

インタビューは、①崋山役：伊藤伸浩、②網元清太郎役：樺山伸次(演劇未経験)、③たか役：河村治代、④斎藤よの役：野村満里奈、⑤藤田座長夫妻にお願いした。

6.2 インタビュー項目

①崋山劇に応募した動機、②役を演じるにあたって留意・工夫した点、③稽古で苦労したこと、④本番で感じたこと、⑤終演してからの感想、⑥自分の中で変化したもの、⑦崋山劇で何を学んだか、それをどう生かしていくか、⑧崋山劇を通じて、「つながり」と「共感」をどう感じたか、⑨今まで一番印象に残っている出演作は、⑩役者を続けている魅力は、⑪役者をやめられない理由は、⑫どういう役者になりたいと思って演劇を続けているのか、⑬仕事と演劇の両立について。

7 「つながり」と「共感」について

「つながり」を『広辞苑』で見れば、①つながること、また、そのもの。②きずな。③連携、関係。とある。「共感」は人の考えや主張に、自分も全く同じように感ずること。また、その感情、同感。とある。

ドイツの社会学・哲学者ジンメル(1858-

1918)は、社会の本質は「心的相互作用(人間たちが頭のなかでいろいろなことを考えながら、お互いに関わりをもつ)」というところにあるとした。自分の思いや考えはそのままで100%相手に理解されることは原理的に無理だという前提にたつ。これは他者との関係の絶望を意味するのではなく、この事実がコミュニケーション=つながりの出発点である⁽¹⁹⁾とした。

一方、源了圓(1920-2020)は日本文化を「情と共感の文化」とし、情(こころ)は古くから心の中心的役割を演ずるもの、この情の他者に向かって発動したすがたが情けであり、共感である⁽²⁰⁾とした。

人間は一人では生きていけない。生きていくことのできない存在である。他との「つながり」、他のお陰で生きることができる。それは、他の物や他の生き物との関係でもそうだし、特に他の人間との「つながり」によって生きている。人間は「関係的存在」であり、仏教でいえば「縁起」的存在なのである。

今回の華山劇の監修者岡本善裕は、こう語る。

「芝居こそ「つながり」と「共感力」そのものである。役者は台本を読み、役の気持ちに「共感」し、その役同士が相手の役に「共感」し、舞台上で演じ、客はそれを観て「共感」する。その空気が役者に伝わり役者も「共感」する。役者・スタッフ・観客が、一体となり、「共感」し「つながる」。華山劇で「つながり」ができて、稽古し、上演することで「共感」し合い、観客とも「共感」する。何十、何百の人が「共感」し「つながる」一期一会の空間。まさに、これこそ、芝居の醍醐味だ。」

また、華山劇出演者のインタビューでも、「「つながり」と「共感」はすごく感じ、多くの人との新しい出会いが収穫だった。また、地域への想い、「田原愛」が一層強くなった。」、「終演してからでも、華山劇出演者のグループラインによる「つながり」、華山次男の渡

辺小崋(1835-1887)の絵画を知ることができた「つながり」、「大人の導き方によって子供本来の魅力が舞台上に生き、不器用な大人をひっぱってくれる、子どもたちとの「共感」を感じる。」、「障がい者支援の現場にいるが、稽古において、役者同士で考えそれを繰り返すことが演劇には必要であり、それが障がい者を取りまく社会にとっても大切である。それが「つながり」となり、誰かの気持ちを理解するという「共感」となる。」、「出演する場面は違っても、一緒に華山劇をやれたという「つながり」と「共感」を実感。」とそれぞれ語った。

SNSの発達により、今はインターネットが大きな影響力をもつようになった。何か知りたいときはスマートフォンで検索すればそれで済む。誰もが同じサイトで検索し、そういうものかと納得して生きていく世の中となった。同時に近くの人々とつながりにくくなる副作用も生じている。

ほとんどの出演者が、本番直前の妙法寺での華山劇成功祈願に訪れたときは「つながり」を実感したと語るように、SNSでのつながりよりも、直接人に会って生身での付き合いの「つながり」の大切さを実感することができた。

8 まとめ

コロナ禍であったが、感染対策を徹底し、オーディション～稽古～公演まで関係者誰一人感染することもなく終えることができた。大がかりな華山劇は東三河演劇界の集大成といえるものであり、奇跡の演劇であった。

華山劇は多くの人との「つながり」と「共感」もつことができた。そして、華山劇の遺したものは、主要出演者インタビューからも様々であった。

華山劇で松崎慊堂の妻女くま役の青山加代子は、「華山劇は出演者・観客とも涙を流し

て喜んだ。演劇は不思議な力がある。崋山と出会えて本当に良かった。崋山劇が終わった感じはしない。この芝居をもっと多くの人に見てもらいたい。」と語る。

崋山劇が終了して、2022年1月29日、キャスト・スタッフ・音響照明・受付や会場係まで含めて、崋山会館で「崋山劇報告会」が開催された。その席で参加者全員が一人一人マイクの前で思いを語った。

そして、多くの有志が参加して開催された、6月25日の「崋山劇慰労会」では、これで終わることなく年1回は皆で集まることを約束し合った。その後、キャスト・スタッフのグループラインで近況を報告し合い、崋山劇関係者が出演する劇への応援観劇など「つながり」が強固なものになっていると感じるのは、筆者だけではないであろう。

吉田松陰の言葉に、「地を離れて人無し、人を離れて地なし」とあるが、崋山役の伊藤伸浩は、「田原に住んでいて、崋山のことはよく知らなかったが、改めて崋山の功績や人柄などのことを学ぶことができた。崋山を中心とした、地域の関わり方が今後の課題だ。」と語る。

藤田座長は、インタビューで「何年かして崋山の話が出てきたときは、今回の芝居を思い出して欲しい。」と熱い思いを吐露したが、崋山はまぎれもなく田原の偉人であり、誇りである。成功裏に終えた崋山劇を田原のレガシー（遺産）として、世代から世代に語り継いでいく。

それが観客を含め、崋山劇に関わった人の責務と思われる。

【インタビュー1「伊藤伸浩さん」】



(筆者撮影)

プロフィール

崑山劇：渡辺崑山役、市民劇団タハラジャ(所属歴：30年)、田原市生まれ田原市在住。

職業：自営業(瓦・屋根工事業)、趣味：芝居・釣り・日本酒・アニメ観賞(ジャンル問わず)。

座右の銘：頑張ったもん勝ち、努力は裏切らない。

Q 崑山劇に応募した動機

3年前、崑山劇制作当初に作・演出家の岡本善裕さんから声がかかる。

Q 役を演じるにあたって留意した点、工夫した点

お芝居としていいもの、お客さんに見やすいもの、教科書的でないものを。

崑山は神格化された特別な存在ではなく、身近な存在として、人としての弱さといった親近感の湧く、「人間崑山」を演じた。悲しい物語だが、家族や仲間に愛され、幸せな人だったのではないか。

観客の皆さんに、崑山に関心をもってもらいたい。いろいろな点で気を遣っていた。

Q 稽古で苦勞したこと

演出が細かかったが、もっと好きにやらして欲しかった。

いいものにしよう、あらゆることに気配りをしていた。苦勞はなく、楽しかった。

Q 本番で感じたこと

お芝居はライブ。お客さんの反応、空気を感じながら演じていた。

楽しくてしょうがなかった。ワクワク感が止まらなかった。お客さんを楽しませてやるぞ。そこにはプロの役者もアマチュアも関係ない。初めての出演者が多く楽しかった。

Q 終演してからの感想

出身校の田原中部小学校では、毎年少年崑山劇が開催されるが、自分が主役を演じるなんて、思いもしなかった。「エライ」ことになったと思ったが、終演した今、自分としてはミスなく演じることができて良かった。本当に「エライこと」やっちゃった。

Q 崑山劇で何を学んだか

田原に住んでいて、正直、崑山のことはよく知らなかったが、改めて崑山の功績や人柄などのことを学ぶことができた。崑山を中心とした、地域の関わり方が今後の課題だと思う。

Q 崑山劇を通じて、「つながり」と「共感」をどう感じたか

「つながり」と「共感」はすごく感じた。多くの人との新しい出会いが収穫だった。

地域への想い、「田原愛」が一層強くなった。

Q 今までに一番印象に残っている作品は

台本のいいものは印象に残っている。華山劇は、印象に残る作品として上位にランクされる。それは、芝居作りの体制・新しい仲間との出会いなどがあったから。

Q 演劇歴

約30本の舞台に出演。

Q 役者を続けている魅力は、役者をやめられない理由は

役に向き合い、苦しんで頑張った後に、お客さんを含めた関係者皆で感動を共有できる。

Q どういう役者になりたいか

稽古を積み上げて、本番に臨むタイプだけど、もっと融通の利く、器用な役者になりたい。

Q 伊藤さんにとって演劇とは

人生の栄養、自分とは違う人生経験ができる。

10本の芝居をやれば、10倍の人生を経験することができる。

Q 伊藤さんにとって演技(演技する)とは

自分にとって演技するとは、本気でやること。演じない、演じようとしない。

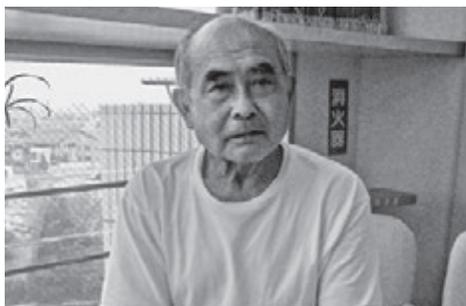
本気でないと芝居はお客さんに伝わらない。

Q 仕事との両立について

台本は稽古場に行ってから開くようにしている。

仕事場への道中、仕事中の休み時間に台本を開くことはしない。共演者のことを考えることはある。

【インタビュー2「縦山伸次さん」】



(筆者撮影)

プロフィール

72歳、崋山劇：網元清太郎役、田原市生まれ・田原市在住、職業：50年間養豚業・70歳から福祉事業所勤務。

趣味：郷土史・俳句・宗教・自然農法・演劇・看取り・傾聴ボランティア。

座右の銘：一つずつ・一歩ずつ、死ぬまで勉強、すべてに全力投球。

来年からは、「社会福祉士国家試験」に挑戦するという、いくつになってもチャレンジ精神を忘れない、バイタリティー溢れるまさに「人生の達人」。

Q 崋山劇に応募した動機

好奇心から。杉浦明平著『小説渡辺崋山』に登場する人物を崋山劇で追体験したかった。

Q 役を演じるにあたって留意した点、工夫した点

網元清太郎に、徹底してなりきる。

Q 稽古で苦労したこと

セリフを覚えるのが大変だった。俳優の金澤琢久磨さん（崋山劇：高野長英役・陽炎坐主宰）が動きながらセリフを覚えているのを見て、とても参考になり、真似をした。

Q 本番で感じたこと

多くの人に来てもらい（チケットを40～50人に買ってもらった）、花束やお土産を沢山もらい嬉しかった。自分なりに大満足。

Q 終演してからの感想、自分の中で変化したものはあるか

もっと演劇をやりたくなった。いろんな役をやりたい。今一番やりたいのは義理・人情に溢れた侠客役、似合うかな。

Q 崋山劇で何を学んだか

崋山劇に登場する人物の過去の家系を知ることができた。

Q 崋山劇を通じて、「つながり」と「共感」をどう感じたか

演劇は初めてだったが、出演する場面は違っても、一緒に崋山劇をやれたという、つながりと共感をすごく実感。もっと多くの人と付き合いたい。

Q 役者を続けてやろうとする魅力は

その人になり切れる演技、演出家も出演作で違うがアドリブでOKという人もいる。

Q 縦山さんにとって演劇とは

タイプの違う、いろんな人間になることができ、自分の「カラ」を破れることができる。

【インタビュー3「河村治代さん」】



(筆者撮影)

プロフィール

崋山劇：たか(崋山の妻役)、演劇衆団アートストームゼロシアター(豊川市)所属、東三河演劇ネットワーク事務局担当、高校・大学は演劇部所属。職業：公務員、一宮市出身・豊橋市在住。

趣味：すべて演劇につながるもの、ドラマ(演じる人の目付き)、読書(太宰治・川端康成・夏目漱石・坂口安吾などの文豪作品)。

座右の銘：転んだらただで起きるな、一期一会、すべて芸の肥やし。

Q崋山劇に応募した動機

主要な役は決まっていたが、自分としては、たか役以外に、竹役(深川芸者、画のモデル)、斎藤よの役も惹かれたが、年齢的に無いかなど。

Q役を演じるにあたって留意した点、工夫した点

家庭を預かる者として、崋山の暮らしぶりの一面を表すことに力を注いだ。

武家の妻としての役作りと、その時代の背景を中心にした思考回路に自身を整えた。

作・演出家の岡本善裕さんからその時代の暮らしぶりをていねいに見せたいと聞いていた。

崋山の暮らしぶりを担う役なので、喋らなくてその場の雰囲気が出せるよう、所作などを中島嘉右衛門(奉行所与力)役の草柳颯さんから教えて頂いた。

Q稽古で苦労したこと

出演者が多かったが、コロナでもあり、稽古時間が限られるので、岡本善裕さんに、自分の演技指導に時間をとらせないように、最少回数で決めるように気を付けた。

Q本番で感じたこと

本番を通して、出演者全員でタスキをつなぐような「絆」を感じた。

Q終演してからの感想、自分の中で変化したものはあるか

変化はないが、渡辺崋山のことについて関心が高まった。

Q崋山劇で何を学んだか

初舞台の子役との付き合い方については多くのことを学んだ。

子どもが信頼できるパートナーとなること、大人の導き方によって子供本来の魅力が舞台に生き、不器用な大人をひっぱってくれることを、今回の崋山劇であらためて学んだ。

Q崋山劇を通じて、「つながり」と「共感」をどう感じたか

終演してからでも、崋山劇出演者のグループラインによる「つながり」、渡辺小崋の絵画を知ることができた「つながり」、子どもたちとの「共感」を感じる。

Q 今までに一番印象に残っている作品は

演劇を始めてから、50本以上の作品に出演したが、毎回最高にしようと思ってやっており、印象に残っているのは出演作品は全部。強いて言うなら、私の私の人生を変えた3本の芝居について

1本目は、1992年11月、名古屋大学劇団新生 第25回独立公演「半神」作：野田秀樹 演出：吉戸俊祐、役名：マーメイド(化物一味の1体)。それまでの自分とは違うタイプの役だった。

2本目は、2011年8月、第2回東三河演劇祭企画作品「残された夏へ ～豊川海軍工廠空襲の記憶～」作・演出：伊沢勉 役名：語り(録音)／主人公・緑の母(ダブルキャスト)

一役者なのに、脚本を変えるよう要求したり、分を弁えないふるまいで当初の役を降ろされ、猛反省した。

3本目は、2013年2月、劇団しゅらざ 第10回公演 「四人姉妹」作：田窪一世 演出：長坂敏仕、役名：深沢奈々(主人公の生き別れの姉を騙る詐欺師(犯人))。

劇団の考えに合わせることができた。自分の目指す姿(自分のやってきたこと)が実現できた。いろんな劇団の作品に出演して、劇団によってやり方が違うことが認識できた。

Q 役者を続けている魅力は、やめられない理由は

役を演じる楽しさ、演劇に生きることが楽しい。脚本があり、稽古して、本番を迎える。全部楽しい。経験はすべて芸の肥やし。経験することがすべて芸に生きる。

Q どういう役者になりたいか

どんな役でもやれる、使い勝手がいい役者。苦手なことでも役のためなら、経験してみようと思える。

Q 河村さんにとって演劇とは

生きるのに必要なこと、もっと言うなら、エネルギー源。元気のもと。美容と健康を保つ目的であり、手段(心身共に)。癒やし。免罪符。色々な世界とつながる窓。

疲れていても、演劇に触れると元気になれる。観るのも演じるのもの両方。

そして、仕事と自分と演劇のバランスをとることが大切。

Q 河村さんにとって演技する意味は

作家や演出家が作品にこめた想い、与えられたシーン・セリフ・役の魅力を、自分の頭と身体、これまで身につけたもの全てを使って、観客に伝わるように、表現すること。

役者は表現者、台本に書かれていることを表現、演出家がやりたいことを表現、脚本からよみとって表現する、役を果たす、発声・身体作り、違うことをやろうと思えば、演技・人生経験が必要、やりたかったら、自分の中に入れる、自分がそうなるように。

Q 仕事との両立について

大学3年で学生劇団を引退してから10年間(大学院修了含む)は研究・仕事中心の生活をした。演劇をやるからには、仕事に支障をきたさないようにしている。

【インタビュー4「野村満里奈さん」】



(筆者撮影)

プロフィール

華山劇：斎藤よの(華山の画弟子役) 役、名古屋市出身・田原市在住、職業：団体職員。

高校時代は演劇部、大学生の時、1年間ベトナムに滞在。

趣味：ヨガ・読書(日本語教育関係の本)、ゴスペル「奏DAYS(かなでいず)」所属。

座右の銘：為せば成る。

Q 華山劇に応募した動機

豊橋市での市民劇に何人かの友人が出演しており、とても感動し、自分も声を出す機会が欲しいと思っていたとき、たはら国際交流協会の会合で作・演出家の岡本善裕さんから「華山劇に出てみないか」と声をかけられる。

Q 役を演じるにあたって留意した点、工夫した点

渡辺華山の絵画が全く分からないので、絵画を理解する努力はオーディション後、時間がないので諦めた。稽古開始から本番まで、歴史に詳しい友人(50代女性)から斎藤よのについての概要を聞いた。台本を読んで、田原市博物館に行くと発見もあり、学びになった。

渡辺華山関連本は極力、読むようにした。

Q 稽古で苦労したこと

客観的に自分を見つめる機会が今まであまりなかったので、「まばたきが多い」「もっと〇〇して」と言われても、理解できなかった。ビデオに録画して、見て振り返ることをやらなかったため、個人的には辛く、知り合いがない状態だったので、ビデオ撮影を頼みづらかった。

帯状疱疹にかかって、自宅で休養したときにセルフの練習し、回復後、稽古に参加したときに田原藩士真木定前役の仲井朗さんからめっちゃ褒められたことが、自信になったことを思い出す。

Q 本番で感じたこと

演じるのが楽しかった。皆仲がよく、控室では和気あいあいとして、合宿をしているようだった。皆でお菓子を食ったり、話したりすることで、「よし、やるぞ!」という気持ちになった。

立ち上がる時、着物の裾を踏んだ以外は大きくミスをする事もなかった。

千秋楽では幕府代官江川英龍役の嶋田純也さんから「200%で」とアドバイスされたことが効いた。そして「とってもいい演技だった」と褒めてもらえた。本当に嬉しかった。

Q 終演してからの感想、自分の中で変化したものはあるか

発声練習の大切さ、発声練習をしっかりやることにより、声が出ることを身に染みて感じた。

結婚式(2022年11月5日挙式)の話が決まっていく中で、「まばたき」、「眉間のしわ」が気になり、

鏡を見て、笑顔の練習(顔トレ)をするようになった。今も続けている。

終演して1月に開催された「華山劇報告会」で頂いたBlu-ray Disc『上演までの記録(令和3年6月27日～12月5日)』を観て、顔の表情・舌の使い方など指摘されたことがよく理解できた。舌トレをすることで声を出しやすくなった。歌の活動(ゴスペル「奏DAY S(かなでいず)」でも活かしたい。

Q 華山劇で何を学んだか

演劇が一番「自分じゃない誰かの気持ち」を考えることができ、体験できる、学習方法だと思う。そのことが華山劇を通じて理解できた。また、渡辺華山という故郷の偉人を知るいい機会になった。

Q 華山劇を通じて、「つながり」と「共感」をどう感じたか

現在、障がい者支援の現場にいるが、役者同士で考えそれを繰り返すことが演劇には必要であり、それが障がい者をとりまく社会にとっても大切である。それが「つながり」となり、誰かの気持ちを理解するという「共感」につながる。

劇作家・演出家の平田オリザ(1962-)さんも、ここからスタートしていると思うが、演劇はわざとらしくて、うさんくさいとイメージがどうしてもある。長く続けている人からすれば、あまり感じないことかもしれないが、本当は演劇的活動を取り入れたことを現場でもやりたい。もっと気楽に。それは芝居じゃないよと言われても、そこからやらないと、「相手のことを考えない」=「共感しない」人が、もっと増えてしまうと思う。

Q 役者を続けるならどんな作品に出演したいか

現代劇、日本在住の外国人と異文化を理解しあえるような作品に出演したい。

日本語教育からできる演劇活動をやりたい。

Q 仕事との両立について

仕事後の稽古は本当に疲れた。

基本的に稽古は平日は19時から、土・日曜日だったので両立は可能だった。

【インタビュー5「藤田直秀さん、ひとみさん夫妻」】



右(夫)直秀さん 左(妻)ひとみさん(筆者撮影)

プロフィール

崑山劇：(夫) 脚本補作・椿椿山(崑山の画弟子)役、(妻) えい(崑山の母親)役。

職業：自営(家具・建具製造)。(夫) 田原市出身・田原市在住、(妻) 東京都出身・田原市在住。

趣味：(夫) パチンコ、読書(杉浦明平の作品『渥美だより』は生きる指針となった)。

(妻) 演劇がすべて。

座右の銘：(夫) 明日できることは今日しない。(妻) 継続は力なり。

劇団タハラジャは岡本善裕さんや藤田夫妻が中心となって、33年前設立、(妻)は初代座長、(夫)は現座長、現所属劇団員は10数名。

Qお二人の出逢いは

高校・大学で学生演劇をやっており、大学生の時、天童荒太作『風をなくした道化たち』で、心中する役で共演、二人の恋慕の想いが募り、演技と私生活が全く区別ができない深い仲となり、結婚に到る。

(夫)(妻)「私達、若かったのね」

Q崑山劇について

5年前、渡辺崑山研究の第一人者、愛知大学元教授の別所興一先生からライフワークの総仕上げとして渡辺崑山劇をやりたいという提案があり、岡本善裕さんと(夫)直秀さんで脚本を作成、崑山劇に関わる諸団体と調整して進める。3年前から配役に取りかかり主要な役はタハラジャを中心とした東三河演劇ネットワークに加盟する劇団員で決定した。他の役は、昨年6月のオーディションで選考した。オーディションは制作サイドの求める人員に集まって頂き、誰一人断ることなく配役が決定し、稽古には入れたことは本当によかった。

結果として崑山劇は多くのお客さんに足を運んでもらい、成功裏に終わったが、運営面からみれば、お金の問題、他団体からの要望もあり、自分たちの思うようには作れなかった。

Q稽古全般で苦労したこと、留意した点、工夫した点

(妻)人数が多く、皆仕事も持っているので稽古日の調整が大変。

市民劇なので、少々失敗しても、やれるところでやろう。

(夫)いい加減な芝居や態度ではダメ。真剣に取り組まないと。

Q役を演じるにあたって留意した点、工夫した点

(夫)崑山劇全部を仕切る立場なので、自分の椿山の役のことより、他の人の指導で一杯だった。

Q本番で感じたこと

(夫) コロナで大変な中、誰一人欠けることなく、本番を迎えることができてよかった。

(妻) やり切ったとは思わない、これがうまくいったとは思わない。

Q 終演しての感想

(妻) 今回の崋山劇の台本が好きではなかった。協力諸団体の立場もあり、多くの場面を盛り込んだが、崋山の生涯を取り上げるのではなく、崋山の葛藤の場面といった、1カ所を掘り下げて芝居をやりたい。

(夫) 長崎遊学を断念した場面などを取り上げた芝居をやりたい。

(妻) 制作者の立場として、誰かコロナにならないか、ずっと心配した。何事もなく本当によかった。

Q 崋山劇で何を学んだか、それをどう生かしていくか

(妻) 実在の人物なので、崋山に関する多くの本を読み、崋山に対して深みを増した。時代考証も勉強になった。

(夫) 何年かして崋山の話が出てきたときは、今回の芝居を思い出して欲しい。

崋山は田原では偉人であり、多くの人が立派な人という捉え方をしているが、「人間崋山」は人間性豊かな多面性をもった人であり、多くの人の捉え方が崋山を狭くしている。

Q 崋山劇を通じて、「つながり」と「共感」をどう感じたか

(夫) (妻) グループラインでつながることにより、知り合いが増えた。

Q 演劇歴は

(夫) 約40本の作品に出演、(妻) 約70本の作品に出演

誰からも言われることなく、自分たちの芝居をやりたい。

Q 役者をやめられない理由は、続けるならどんな作品に出演したいか

(夫) 役者をやって、他人の評価を受け続けられる。もうしんどい思うこともあるが、人から言われることによって、自分の存在価値を認識できる。応援してくれる人から「やめないで」と言われる。

(妻) 年を重ね、セリフを覚えられなくなってきたが、芝居は、皆で一つのことを掘り下げ、皆で作りに上げていくことができる。

芝居はいろんな役を演じることができる。いろんな役の人生をなぞらせることができる。

Q どういう役者になりたいか

(夫) いるだけでいいという存在感のある役者

(妻) これからは、老いと闘いになるが、与えられた役を演じ切れる役者。

プロはお金をもらっているからイヤでもやるが、アマチュアはやりたいこと、描きたいことを好きなように描く、お金は考えない。

Q 仕事との両立について

(夫) (妻) 現場に行く道すがら、セルフの稽古をする。

付記

本稿作成にあたり、崋山劇関係者皆様の取材協力ならびに掲載を承諾して頂き、御礼申し上げます。

注記

- (1)崋山劇実行委員会事務局『崋山劇アンケート結果報告(令和3年12月4日～5日上演分)』
- (2)東日新聞2021年12月31日付「徳川知識人の生きざまを追体験」から抜粋
- (3)崋山劇リーフレット「今なぜ崋山か、崋山劇から」から抜粋
- (4)別紙【インタビュー5(藤田夫妻)】
- (5)同上
- (6)「田原市指定文化財「松崎慊堂筆 崋山赦免建白書」(口語訳)」『田原市博物館研究紀要第9号 田原の文化第43号』pp41-56
- (7)鈴木瑞枝『松崎慊堂－その生涯と彼をめぐる人びと－』研文出版2002 p7
- (8)ドナルド・キーン『渡辺崋山』新潮社2007 pp239-241
- (9)前掲7 pp34-35 漢学者・史家、中根香亭『香亭雅談』から
- (10)松崎慊堂 山田琢訳注『慊堂日瀝 全6巻』平凡社1980
- (11)小田貴月・文藝春秋編『高倉健の美学』文藝春秋2020 p68
- (12)鴻上尚文『演劇入門 生きることは演じること』集英社新書2021 p172
- (13)鴻上尚文『発生と身体レッスン』白水社2012 pp119-121
- (14)渡辺淳一『秘すれば花』サンマーク出版2001 p88
- (15)西野春雄 伊海充光『日本人のこころの言葉 世阿弥』創元社2013 p14
- (16)同上 p106
- (17)前掲1
- (18)東日新聞2021年12月31日付「崋山劇実行委員会観賞アンケート結果をまとめる」から
- (19)菅野仁『ジンメル・つながりの哲学』NHKブックス2003 pp247-249

(20)源了圓『義理と人情』中公新書1969 pp14-20

参考文献

- 小澤耕一『崋山渡邊登』財団法人崋山会1965
 崋山言行録三州會譯編『渡辺崋山の言葉』三州閣1941
 加藤文三『渡辺崋山』大月書店1996
 白洲正子『世阿弥』講談社文芸文庫1996
 杉浦明平『小説渡辺崋山上・下』朝日新聞社1971
 世阿弥『風姿花伝』ワイド岩波文庫1991
 世阿弥 現代語訳『風姿花伝』致知出版社2014
 千田是也『演劇入門』岩波新書1966
 田中裕校注『世阿弥芸術論集』新潮社1976
 土屋敬恵一郎『世阿弥の言葉』岩波現代文庫2013
 別所興一『渡辺崋山－郷国と世界へのまなざし－』あるむ2014